

受刑者の心と向き合う

刑務所とアートをテーマにした公開講座が、浜松市中区の静岡文化芸術大で開かれた。学生や保護司、保護観察官など約100人が参加し、映画の上映やシンポジウムを通して受刑者の心との向き合い方について考えを深めた。
(東田茉莉瑛)

映画やシンポ 文化芸大で公開講座



刑務所とアートについて話す風間勇助さん(中央)、上田假奈代さん(左)、南田明美さん(右)＝浜松市中区の静岡文化芸術大で

公開講座の前半では、日本で初めて刑務所内を長期撮影した二〇二〇年公開のドキュメンタリー映画「ブリズン・サークル」が上映された。映画は、〇八年に開設した官民協働の刑務所「島根あさひ社会復帰促進センター」が舞台。詐欺や傷害致死の罪などで服役している四人の若者が、対話を重視する更生プログラム「TC(回復共同体)」を通して自身の過去を見つめ、生き方を発見していく姿を映している。

後半はシンポジウムが開かれ、刑務所とアートをテーマに研究する奈良県立大講師の風間勇助さん、アート活動のNPO法人を運営する詩人の上田假奈代さん、南田さんが登壇した。同刑務所で詩のワークショップを担当している上田さんは、映画内でコミュニケーションが活発になるにつれて受刑者の表情が明るくなっていったことに触れ、「聞いている」と「見守っている」ことを伝える大事さを痛感したと振り返った。

風間さんは、一般的な刑務所内では受刑者が自由に発言することが許されていないと指摘。自分自身の心を見つめ、表現する機会としてのアートの役割に期待した。